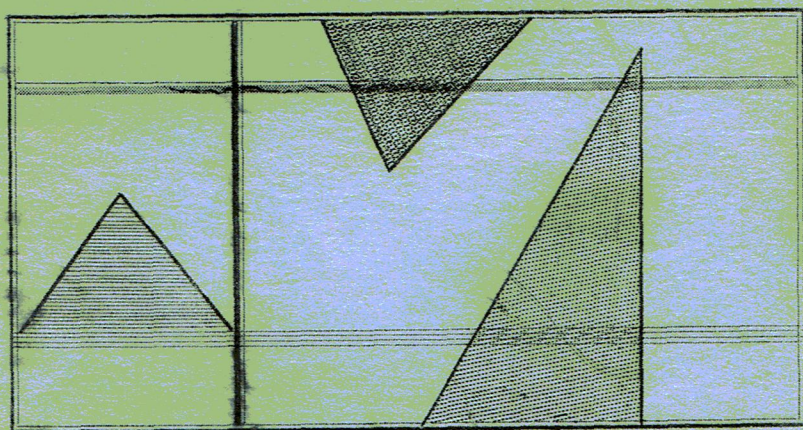
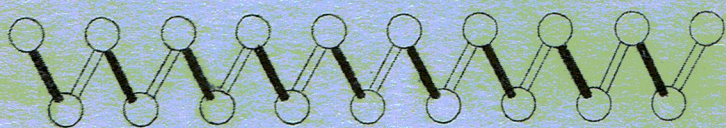


纖維化學科機關誌

CHAIN



NO. 3

1959. 7

CHAIN 目 次 第三号

「正しい事」と「平和」ということ	浜村 保次	2
繊維化学教室の反省	吉野 泰	3
新入生諸氏を迎えて	岩崎振一郎	5
春の伊豆紀行		7
石の上の三年	吉田 周司	12
開 眼	相宅 省吾	13
無 題	分部 好孝	15
先輩の傾り		17
夜 想	竹田 敬司	18
クラブ活動に関するとりとめのない話	高橋 宏実	19
話し合いの場をひろげるために	太田 晋一	20
神との対話	近藤 洋一	22
天災は忘れたところにやってくる	稲野 光正	24
別 離	鈴木 溪太郎	31
随想 フリードリッヒ大王	加藤 肇彦	27
鬼いの俣に	荒谷 善夫	28
研究室紹介 岩崎研究室のプロフィール	イワケン生	32
町田研究室	森岡 忠良	35
實志	白尾 三樹	36
浜村	井関 匠三	38
相宅	池本 昌憲	40
編集後記		43

「正しい事」と「平和」ということ

沢村保次

「正しい議論はなかなか通り難い」という言葉はよく云う事でもあり、又よく聞く言葉でもある。

しかし考えてみると、けんかでも戦争でも、この正しいことの鉢合せの場合がほとんどである。ということはこの「正しい」ということが如何にむづかしい事かという事を意味する。

理論的に割切つて「正しい」とする事は一応よい。しかしこれに固執しては科学の世界に於いてさえ間違つて来る。而して科学の進歩も飛躍しなくなる。一つの例を挙げると例えば光で可分化作用を営み得る三家栄養的な植物性の生物が地球上に現われた生物の始まりであるとする考えは一応理論的にも肯定出来るし、幾世紀かの向我々の考えを支配して来た。しかしこれに固執しては生命の起源は永久に不明のままであつたであらう。オパーリンの有名な生命の起源はこのような固定観念を無視した所にその発展が約束された。

科学世界に於てさえ「部分的には正しい」「その時は正しいと思われた」或は「或假定の下では正しい」というのが正当であらうか、「これはいつの場合でも正しいんだ」というものはあり得ない。

まして人間社会万般の事をこれが正しいとして固執し、これを押し通そうとすることは既に不正を働く事になり平地に波乱を起すに等しい事になる。斗争の大半はこれが原因である。

しかし「正しさ」のこの認識に立つて行動する事は決して生やさしい事ではなく、極度の謙遜が必要であり又奉仕する心がなくてはならない。而してこれこそが地上に平和をもたらす唯一の道である。

単なる利益追究を事とする実業家の正義、単なる政治的野望で動く政治家の正義、或は又職業的労働運動指導者の正義ほど馬鹿げたものはない。而も彼らは自分達の呼称する正義に酔っぱらって何も見えなくなっている。

これからの青年はこの「正しさ」の認識の上に立つて世界を見直す必要がある。

繊維化学教室の反省

三回生 吉野 泰

私がこれから述べることは、今まで多くの先輩が在学中ずっと意識的に或は無意識的にさぞかし不快の念にとらわれることだろうと思う。そのことについてなのです。

私たちは入学した途端それぞれの姓名の頭字についてアルファベット順にプロットされてしまいます。このこと自体は別に大した向題ではないのですが、これが実は先生にとっては実に都合よくそして学生にとっては甚だ迷惑に使用されているのです。二、三回生の諸君がじつと目をつむって自分の、繊維化学教室での交友関係を省みて下さるとわかるように、K₁君にはI君M君やK₂君、A₁君にはA₂君E君F君というように必ず名義上での並傍に比較的親しい交友があり、又A、B、Cの諸君は、X、Y、Zの諸君とはあまりつき合いがない筈です。こんな奇現象がどこから起ったか。考えるまでもなく、その原因は、実験室のテーブルにはじめて学生を配置する際、どの先生と決つてように室の片隅から順に名義の順にという方法をとられたことにあるのです。即ち一回生の分析化学実験の時の配置方法二回生前期の有機化学実験の時にまた、先生と実験室こそ変つてもやはり持ち越されるので一回生のときに決つた向う三軒両隣りは、二回生になつても殆んど変わりません。二回生後期の物理化学実験のときは、各テーブルに実験課題が固定されていて、学生は各班がそのテーブルを一週毎にかわつて歩くといふいわゆるグルグル廻り方式でしたが、その班なるものをきめる際にやはり先生は部屋の隅のテーブルから名義順に学生を配置してオーのテーブルに配置されたものをオー班、オニのテーブルをオニ班、というようにされたので結果は同じことでした。各学年において最も交友関係の生じやすい実験期間に二年向も同一の小社会に居続けるのですから少々虫のすかん同士でも、いやでも親しくなつてしまうのです。このことは逆に学生はクラス員全体が均一に混合し合うことなしに、一回生の時にできた結晶状態のまゝで何年かをすごすことを意味します。三回生になつて、研究室ごとに分離する際にもやっぱり名義の何番から何番まではどここの研究室へといふふうに分けられました。学生は三回生になつても依然として一回生のときにきめられた小社会の中に閉じこめられ続けるのです。とるに足りぬ向題に思えるかも知れませんが、入学してから卒業

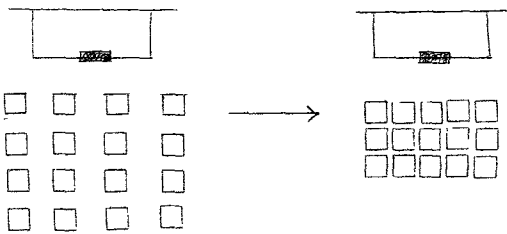
するまででは、このことはばかにならない事になります。

新憲法に教育の機会均等がうたわれているのであれば、学生生活においても交友の機会均等がさまたげられる「名義順制」は当然規制されるべきだと思います。

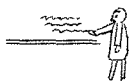
次にこれは或る特定の先生のことなのですが、黒板に字をお書きになるとき、あたかも自分一人で勉強されているんじゃないかしらと疑いたくなるような書き方をなさるんです。その様子を絵に書くと次のようです。



説明を加えながらどんどん書いて居られるのですが、字を書かれる位置が低いのです。学生にみえるよう体を開いて下さることなしに、黒板の前に立ちはだかって書いておられる。その上、字が小さくて、お声も小さい。大部分の学生が先生の御説明に参加できずに、先生一人の独走になってしまうのです。そのため先生の御講義の時には、学生が少しでも前へ出ようとして教室の机はよく次のような大移動を起して、後で掃除婦のおばさん達を泣かしたものでした。お声の小さいのはがまんし



ますから、字はサービスに大きく書いて下さい。そしてなるべく高い位置（頭より上）に、もしどうしても頭より低い位置に書かねばならぬ時は、どうか図のように充分に体を開いてお書



きになるよう願います。こうすれば困るのは教室の右の最前列にいる学生だけですみます、立ちふさがってお書きになると、右の最前列の者しか見えないのです。「こんな事は教師としての常識だ」とおっしゃる先生もおられましようが、実際ご自分で授業中反省なさってみて下さい。

今度は私たち学生が反省してみます。今でも残念でならないのは四月十六日に階段教室で行われたC科の新生歓迎会における上級生の態度なのです。

自分達が新生として入って来た時のことを記憶してさえいれば、ああいう会合で、入学当時のフレッシュな同学精神をにぶらせるような言動があつてはならないのです。先生が折角色々訓示されて新生と受験生時代以上に勉強しようという心がまえができたであろう矢先に、上級生のあいさつが如った途端からそれはアソミンにふみにじられてしまったのです。「一、二回

生のときは交際を広く思い切り遊んだ方がよい」一年間の勉強は二三ヶ月で一度でやれる。我々の部に入りたまえ」とか何とか、それ以後の発言は二三人の人を除いて殆んどが「我々の部へ、我々の部へ」の勧誘どろ合戦だった。

遊ぶなんてことは、勉強のできないものが、在学中自然に覚えることなのであつて、入部勧誘も学内のポスターを掲示すればすむことなのです。新入生の幾人かは、あの時、上級生に失望を感じておられたかも知れません。私も二回生当初は新入生歓迎コンパの席上で「一回生の時は遊んだ方がいい」と発言した恥ずかしい記憶がありますが、どうも下級生に向つて遊ぶ遊ぶというのは繊維化学教室の通弊らしいのです。勉強の苦手な者が遊ぶのは仕方がないとして、天性豊かな秀才までを遊ぶ遊ぶと引きずりおろすのはやめようではありませんか。とくに16日のあのような大切な時に、上級者はとつと自分の言動に気をつけるべきだと思います。現代は科学の時代であり、国家的にも優れた技術者が欠乏している折から、我々の不注意な発言によつてもしよ一人でも向上すべき人が墮落したとしたら申訳ないではありませんか。自分は遊んでいても、下級生には「勉強しろ、勉強しろ」というのが上級生の眞の愛情だと思ふのです。以上述べたことをもう一度繰り返して文を結ぶことにします。

1. 学生をアルファベット順の小社会に閉じ込めるな。
2. 教師は自分自身のレクチャー方法を反省せよ。
3. 上級生は下級生に油断させるな。

新入生諸氏を迎えて

——岩 崎 振 一 郎——

(1) 大学の使命

先づやうに諸子の入学を祝する。それについても考えねばならぬことは大学の使命ということである。私は過去十年間、絶えず大学の使命というものを如何にせば簡単に表現しうるかということを考えてきた。そして数年前に大学とは要するに有能なる紳士を養成する所であるという結論に達した。又我々の大学は技術大学である。故に有能なる高級技術者を養成する事が使命である。従つて、我大学の使命は一言にして云えば *able Engineer gentleman* を養成することである。諸君在学中の修業はすべて此線上に集中せられる。此一線は百千の細い規則よりも適切であり、又厳格であり、

古今の大学に通じて誤らず、内外の大学において停らざる一線である。私は今日現在の諸子を必ずしも紳士として扱わない。紳士の卵として扱う。在学中に紳士の修業をして卒業したら直ちに紳士として通用する人物になってほしいのである。

(2) 低学年に於ける修業について

幸にして、本教室の求人状況は良好であつて、まじめに修学すれば諸子には就職難というものはない。従つて低学年において諸子はのびのびとした性格を養ふ事をおすすめする。昔の高等学校予科の生活を再現するのがよろしい。但し紳士の卵としての節度を失つてはならぬ。次に体育の事である。如何なる秀才でも健康が悪くしては使ひものにならぬ。新制大学の教少き長所の一は体育を重視し誰でも何かスポーツをやるようになったことである。

オ三にクラスメートのことを申したい。同期生は時として肉親の兄弟よりも頼もしきものである。海軍兵学校の同期生は全く親類づき合い以上である。本教室に於てもこれをすすめて実施している。諸子と今日より直ちに同期生全員の兄弟づき合いを実施してほしい。後年必ず得る所多いであろう。

(3) 急進的社會思想の實踐運動と技術大学

今日の技術大学は学校を卒業した丈では何にもならぬ。少くとも十年の實地の修業を経てはじめて一人前の技術者になる。若し、この種思想の實踐運動に関係する人が出ると、当人は勿論のこと、卒業生全部がこの「十年の修業」をする機会を全然与えられないのである。これは諸子をその父母並に社會から預っている我々としては由々しき迷惑であつて、私共は徹に之を禁止せざるを得ないのである。私共に現在社會の欠陥を痛感し、其是正を希う矣に於いて敢えて諸子に劣るものではない。併し世の中の改良には自ら順序があり、各人には自ら与えられたる使命がある。急進的の思想の實踐に直ちに同意し得ざるものである。私は空なる理論として申すのではなく、実は本学部に於て此種の不幸なる事件があり、当事者の悲惨なる不幸事と並に学部全体として受けた重大な創傷をよく知るが故である。

一面あくまで此種思想に興味をよつ学生にとつておよそ本學の如く能率の悪い學校はない。故にその種の諸君は速處は無用であるから、直ちに退學してもつと適した學校に行つてほしい。本學に留る以上、本學の方針を守つてもらうのである。

(4) 國家社會の恩

諸子が本學に學び得るについては多くの人の恩を受けている。櫻然と自

分の権利と位に考えていては罰が当る。尤一に父母又は後援者の恩がある。これは最も分り易いであろう。その他に国家の恩がある。日本の国家は困難なる財政の中から本学に諸子を收容して教育している。それは決して恩賞や外圍や好奇心の爲ではない。金のこと文例にとつても諸子一人を卒業させるに平均 50 万～60 万円の経費を要する。これは諸子の親元から受ける学費よりも多分多い筈である。国家以外に社会や国民も諸子のために色々な便宜や犠牲を払っている。一に立派な技術者となつて日本国民と国家の発展に寄与してほしいからである。

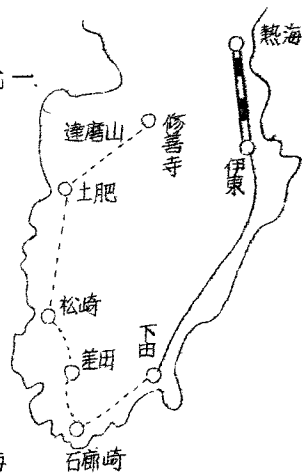
(5) 敢斗精神を持て

本教室草創の頃はまことに貧弱な建物と設備であつた。十年の年月を費して学長以下当局の苦心と諸子先輩の努力によつて漸く今日の名声と設備とに達した。固より決して充分でない。併し京都大学の例でも諸子が本教室草創の意気と努力とを以つて一致してとり立てて呉れるならば日本一の纖維化学教室とする事は必ず可能である。教室を発展せしめるのは決して建物や設備ではない。其中の人の意気である敢斗精神である。吉田松蔭の松下村塾は師匠が土をねり弟子が壁を塗つて建てた貧弱な百姓家である。但し、彼等の敢斗精神は遂によく明治維新の原動力となつて之を完成した。諸子も今の世の松下村塾に入学した心持になつて大いに敢斗精神を発揮し以つて勉学大成してほしい。これが、私が切に諸子に希望し又、期待する所である。

春の伊豆紀行

四回生 柴田満太、松本 浩、坂下允一、
徳山信一、前川輝彦

われら五人はかねてからの伊豆一周徒歩旅行を今春いよいよ実行したのである。費用は全部で二千五百円程度。そのうち交通費に千円とられるから残りは千五百円ということになる。そこで我々は朝は味噌汁。昼はクラッカー、晩はライスカレーという非常態勢の下に五日間で伊豆を廻る予定である。コースは次の通りだ。まず伊東から東海



岸の下田迄バス。あとは石廊崎—差田—松崎—土肥—達磨山—修善寺へと歩く。その間費用がゆるせば(といつてもせいぜい三四百円で泊めてくれる所があればの話だが)宿屋で一泊するという事である。春休みとて皆体をとて

あましている連中ばかりだ。はやる心をおさえかね、予定日を一日くりあげ三月十四日・二十三時三十五分東京行きドンコー列車に走りこむ事となった。電車の神様を自稱するT君。えものをねらうへびよろしく、汽車がとまるやとまらぬやまつ先に乗込んだ。それにつづくM君。彼は昨晚か腹下しだとなげいていたがそんな時には異常な力が出るらしい。僕はテントを持っていたので後からゆっくり汽車へ乗込む。乗る前は皆美人の側へ座るのだと張切っていたが、席をとるといふ悲しき現実の前に皆、はかなく打死した。だが車内には修学旅行の高校生が多く乗っていた。その中は我々の目をかろうじて染りませてくれるのが2,3人。我々は目で追いかけるのが悲しいかなとう名古屋である。その女学生達キアキアさわぎながらおりてしまった。かくて車内は再び平温になり僕達は明日のえい気をやしなう為になんとねることが出来たのである。

(柴田満太記)

X X X

下田を後にして伊豆半島の最南端、石廊崎へ向う。端々とした山道を通ぎると湊から海岸に沿う。国定公園の特別区域はこの辺から始まる。この辺までくると東海岸に比べて海岸の様子は一変し、黒潮に削られた犬牙のような岩が林立し、すばらしい海景が展開する。いかにも南国の感じがする。岬へ出る三百米余の急な坂道から長津呂が見下せる。海蝕によって出来た大海溝である。坂を登りつめ燈台の横のだらだら坂を下るとすぐ神社の岩窟の前に出る。ここには縁結びの神が祭つてあるという。突端は狭い岩頭で、快晴にもかかわらず風が強く、カメラの三脚を立てるにも苦勞するほどである。周囲を眺めると遙か水平線がな角度で見渡すことが出来、自分の立っている岩が海上に孤立しているような錯覚に陥る。この辺は春の訪れが早い。非常に温かい。遙か眼下には観光船が玩具のように浮んでいる。我々はここで粗末ではあるがカロリーの多い食事をとる。

次に我々は北へ向う。西岸沿いには自動車の通るような道もなく、直接北へ抜けるには山越えをする他はない。山を越えると視界が開け、下方に小じんまりした漁村が見える。中木である。段々畑を通つて海岸へ出る。ここまで来るとさすがに旅行者にも会わない。今晚は妻良に泊る予定で再び山道を登つて行く。可成りの強行軍で皆グロッキー気味である。途中通りがりの人に妻良へ抜ける道を尋ねると、そのような道は土地の人でも通らない。この先の差田村の小学校で泊めてもらえばよいということなのでそうすることにした。地図だけに頼ることは危いものである。学校では突然ではいけないということであつたが、校長の好意で公民館を紹介してもらつた。近所の人

人も非常に親切で風呂にも入れてもらった。夜近所の子供達の突然の訪問を受けた。夕方写真をとってやっつて顔見知りとなっていたからすぐに友達となり色々な遊びで遅くまで愉快にすごした。田舎の子供達は素朴で人なつっこいからよい。このようなちよつとした事でも旅先では深く印象に残る。

×

×

(松本 浩記)

三月十七日

前日の強行軍で疲れた体も畳の上での一夜を至るとシヤンとした。今日の行程は差田を発ち、上賀茂を至て蛇石峠を越えて伊豆半島西南岸唯一の町である松崎である。朝食も早々に終え午前十時過出発。空は一雨来そうである。十時出発はこのような徒歩を主とする旅では遅すぎるが、これは履心地が良すぎたせいだ。約一時間半で半島の最南の温泉地、下賀茂につく。これよりいよいよ蛇石峠越えである。ここからは峠を通過して松崎に通ずるバス路線があるのだが昨年の水害の爲この道路は至る所工事中で不通となっておりとてかく十二時発のバスで市ノ瀬まで進む。このころよりポロポロと雨が降り出す。これより蛇石峠まで歩き午後一時頃例のクラッカー、バター、チーズ、イチゴジャムという行動昼食。一同ズヤライスショック気味だが食い気は十分。このあたりから峠までつづら折れの上り坂である。五人もいるこういう峠越えでは面白い。大体一列になつて歩くのだが坂の上りと下りとではその列の順序が当ることである。上りの苦手な丁君は下りになると俄然スピードが出る。小生等は上りは比較的苦にならぬが下りになるといつと列のしんがりだった。約三時間で峠を越えた松崎側の岩科という村に着く。この街道は広いが全くの山中で小雨が吹き降りタイフツ千方だった。一同足に豆をつくつてグロッキー気味で、ここよりバスを利用して松崎町に入る。乗車時間十五分。雨がかなりはげしい。とてかく町役場に行き無料宿の公民館をお世話してもらつてまず一安心。早速コックのS君が得意?の腕を振る。今夜は豚肉の特別料理だ。一同舌鼓を打つて、一瞬にしてたいらげる。午後十時一同グツタリとしてシュラフにもぐり込む。

松崎町は半島西南岸の要港で鮎で知られる那賀川の河口に位し、遠洋漁業の根拠地でカツオ節の本場で知られており又気候が温暖の爲、全国で一番早く鱒がとれ、しかも品質が良い為種繭場所として知られ、静岡県蚕種試験所分場まで設けられている。

我々一行は天候不良の爲断念したのだが、差田から妻良港へ出て、ここから船で北上し松崎へ行くと海岸沿いの景色が非常によいそうである。

伊豆半島は大體、東岸より西岸の方が出入、変化に富み、良港が多い。

十八日

昨夜は三省社（松崎町青年団が所有管理している建物）に泊ったので、テント張りの仕事と窮屈な寝床から解放されて充分休養できたと思つたが、どの顔もいささか元気なさそうであつた。ラジオ体操の騒音でヤツと目を覚ましたようであつた。

九時半に松崎町を出発し、海がよく眺められる西岸沿いのバス道路を進む。ここは東岸ほど往來ははげしくないが、ほこりをかけられるのには変りない。天気は上々。でも遠く北方はかすんでいた。

十時四十分に望が島に到着。景勝の地だけあつて観光客も多く訪れていて、新婚も多く見受けられた。

リュックを下ろし、海につき出た亀島の岩はだにごろ寝し、春の日射しを一杯に浴びる心地は何物にもかえ難い。

遠くかすんで帆船（海王丸らしい）が眺められた。美しいしま模様のある岩壁。そこにくだける波の音。三田郎島の眺めなど十分に味わつた。

例の質素な昼食をすまし、更に北に向う。

午後になって足どりが少しにぶつて来た。数回トラックに手をあげたが、止ってくれる気配はない。

田子ノ浦をすぎ、トンネルを通りぬけ、次の山にさしかかったところで一ぷくした。ここで幸運にも親切な運ちゃんにめぐりあえた。宇久須までのしばらくであつたが、乗物としては一番印象に残つた。クッションのないひどい上下動も、こんなときにはかえって味のあるものである。

途中、^{こがね}黄金崎の景勝があつたが、遠くは曇つていて富士を望めなかつたのは残念である。

朝の顔色からして、たいしてもたないだろうと思つたが、どうやらこの辺が峠らしい。自分は不本意ながら、宇久須から土肥町までバスで直通した。一流温泉旅館に安く泊まるのに成功して、今宵一夜はコック長も最良の日であつた。和服にくつろぎ、ほこりをすっかり洗い流して口腹欲を満たした。でも量は満足できるほどではない。

町中へみんな出てみた。小さな温泉町で、環境の良さそうな町である。あまりはでなものはない。

しばらくぶりだ、テレビ、新聞等にお目にかかつたが、何だか急に山中から町中へ出て来たような気がした。それぞれに英気を養つて、明日の山登りにそなえた。

（とくやましんいち記）

土肥から修善寺へ

西伊豆の早春は栗樹をわたる風の音に、磯辺に打ちよせる波の音に、しつとりとおちついた趣きを伝えていた。

豊かないで湯のけむりに朝の光が柔かくさし込んで、楚々たる彫像が目にひみるように白い。湯にひたりて暫くは追想にふける、宿り女中さんは親切気をさかして御櫃のおかわりを運んでくれる。

さて疲れも癒えて最後の行程につく。

猫越岳支脈の山々をぬってバスは七曲八折、一望に駿河湾をおさめながら土肥峠につく。

ここは達磨山を登って修善寺へのハイキングコース——日くスカイラインハイキングコース——の入口である。人気なき小径は熊笹の屋根うたいに、折ふし開ける視界に、富士を眺め、残雪の淡きに喉うるおし、いつの日か又この径をいとし妻と歩まんなど語らいつ、やがて達磨山の頂に立った。眺望は四方に開けてさえぎるものもなく、重畳する山々の彼方に富士はその雄姿を表わし、遠く日本アルプスの白嶺が連なり、眼下に駿河の海は紫紺の艇を敷く。右顧すれば天城連峰は白雪を戴いて春霞のうちにとけこんでいる。例の如く簡単な昼食をすませて修善寺へ十キロは一気に下る。

浅川は雪どけ水をあつめてはやく。清冽な流れは白石を洗う。やがて桂川と名づけられる程になりて、石橋を渡ればすでに温泉郷である。

山に囲まれた谷あいの町ははや暮れんとし、よきところもなくやむなく神社の境内に野営地をかりる。

さすがに谷風は冷たく、野営のつらきことよ。

寝る前に一あびしようとして^{トツコ}狹^コの湯に出かける。弘法大師が見出したとか、桂川の中に自然石を置んだ湯舟に身を沈めればただ聞くはせせらぎの音。

湯上りの喉うるおさんと炉辺によりてビールを干す。

明くれば二十日、小鳥の囀りに目覚めて六時前、冷えた身体を湯に温める、湯の町の朝は遅くて人影はさらになく、ただ修善寺の曉の鐘の音が溪にこだまするのみ。

神宮夫妻の親切を謝して、古き面にまつわる伝説の地をあとに帰途につく。旅も終りに臨めばさすがに里心切ながら、なお旅寝重ねたき心地捨て難く。移りゆく窓外のながめに、はや次の旅路を胸に画いていた。

(前川輝彦記)

石の上の三年

三回生 吉田周司

毎日、何かを期待して電車やバスにゆられて登校し、そして満ち足りた気持で、又電車、バスにゆられて帰ってゆく人があつたらお会いしたいものである。

気がついてみると、三年たった。只三年がすぎた。こう気がついて昔なら又気力をとり戻すこともできたであろう。しかしこの石の上におちついてからはそうはしなくなった。この大学に入学してうれしかった者は少ないだろう。殆んどないかもしれぬ。そんなときわざわざ“おめでとう”という奴が何とバカに見えたことか。何となく *melanchory* に目をすごし、やはり住めば都、では何かしようという気と起るのが最初の一年。それとその気持だけで過ぎてしまうようだ。マージャン、ダンス、女性の相手、何事も今までと異ったことをやるのがこの頃、そしてやっているうちに、又一年が去る。いつのまにやら最初の一年の気力がどこへやら消去り、後に何か空白なものを感じるようになるのが二年目の終り。この頃にはとはや大学は自分の部屋、何をやらうと気がとがめぬようになっていゝ。自分の部屋では勉強するだけとは限らない。三年目には殆んどすべての講義に顔を出して、大体の調子がわかる。重みや、*speed* が感ぜられないのは自分だけなのだろうか。それから何を得よというのか。三年目、シビレがきれて来た。只その日その日はいき当りばつたりに楽しく(?)すごすことができるのみである。何と後味の悪いことよ。この石の上の三年は我々を大分大人にするようだ。とにかく幾分か大人になってゆく。只講義を聞いて、おっせつかった実験を *Text* 通りやって、只それだけで卒業する利口な人とでてくる。そしてそんな奴らを“利口”という位大人になったということである。二時間近くもかかつて、この学校にでてくる途中の気持を考えてみる。何しに学校へ行くか、その気がはっきりしない場合が多い。そして帰りの電車の中の何と殺ばくたる気持。

期待に答えてくれそうにもなく、そして“家で本を読んだ方が-----”と、それとはっきり感じ始めるのが、やはりこの、しびれが切れる頃のようなのである。

開 眠

相 宅 省 吾

爽やかな五月も終りに近づき、初夏の候になると私の誕生日がやってくる。この頃になると、私は二十年前の実験の失敗が思い出される。その日は私にとってはオニの誕生日であるかも知れない。

私が学校を出たのは昭和16年で、戦争の為に学生生活は徐々に窮屈にはな
って来たが、未だ夢の多い楽しい時代であった。又科学は新しい産業革命の
火を灯した時でもあった。例えばドイツでハーンストラスマンによるウラニ
ウム 235u の核分裂の発見、英国での電離層の研究中超短波の飛行機によ
る反射の発見、又スタウデンガーによる高分子科学の確立等々、又のりの多
い新しい産業即ち原子力工業、エレクトロニクス工業、高分子化学工業の
基礎がこの時代に開かれたものであった。それ故に私も学生も来るべき新し
い時代の息吹きを感じ、前途に希望をいただきながら研究にスポーツに青春を
楽しんでいた。当時繊維産業は平和産業ということで就職の道も全く閉ざさ
れており、志望する人も少なかったが、卒論には繊維講座の桜田先生の前
についた。与えられたテーマはポリエステル合成及び分解反応であった。此
の時デュポン社のナイロンの発明者カロッサーの論文集が発表された。此所
には人間が作りうると思われるあらゆるポリマーについて記載されていた。
これはプラスチック時代を告げる福音書でもあった。それを読みながら心
は躍った。(海の彼方では英国のキマリコ、プリンター社のウインフィールド
とデクソンの二人によりカロッサーの論文集より得たヒントでテリレンの合
成の研究が始められた事など知る由もなかった)。単量体はすべて自分で合
成して行かねばならなかった。アジピン酸はシクロヘキサノールを、セバチ
ン酸はヒマシ油を酸化して作った。ヘキサメチレングライコールはアデピン
酸ジエチルエステルを無水のアルコール中で金属ナトリウムで還元するブー
ボーブランの方法で行った。これは激しい反応であった。アルコール中で金
属ナトリウムは水素の泡を立てながら沸騰した。一度は成功した。そして二
回目もうまく行った。そして数十瓦のグリコールを作った。これからポリ
エステルを重合したが高重合度のものは得られなかった。実験にも馴れ金属
ナトリウムを使う反応はマスターした気になった。小量ずつ作るのが面倒と

5立も入る三口フラスコを貫込み一度に多量のグライコールを作ることにした。

外は爽やかな初夏の候、今日は自分の誕生日。実験が終れば久しぶりに町に出て大きなビフテキにでもかじりつこうかなど考えながら数百瓦の金属ナトリウムを横におき鼻歌まじりにそれをアルコールの中に投込み沸騰させていた。実験も半ばすぎた頃手元が狂ってナトリウムの一片を冷却用の水の中に落した。ナトリウムは激しく水の中を狂奔した。しまった、とそれを取り出そうとしたとたん猛烈な爆音と共に水素ガスは爆発し、アルコールに火がつき、焰が私の頭上から降りそそいだ。息をのむ間もなく倒れようとした。然し一瞬の思が、今倒れれば万事休すだという天の声が、気絶する私を引き戻した。よろめく足をふみしめ水道の口にたどりつき顔や頭の火傷にかまわず眼に入ったアルカリを洗いにかかった。外界は全く乳白の世界だった。いくら洗っても眼からアルカリのぬらめきは消えなかった。爆発と火事に驚いた同室の人がかけつけてくれた。車で病院に運ばれる途中傷ついた眼から入るかすかな光が最後のものかもしれぬというなげきが身にしみた。それから暗黒の世界が続いた。

三日三晩十分毎に洗眼され、アルカリに浸された粘膜をこすり取る治療は丁度大きな熊手で頭の中をえぐるようであった。それよりも心を痛めたのはとり返しのつかぬことになったという悔恨の思いであった。希望に満ちた人生は（今一瞬間まで健やかに動き廻っていたのに）どうしても元に戻らぬ大きな深い断層の後に去った。時の流れの断層の深さを此の時程恐ろしく悲しく感じた事はなかった。口では強いことをいいながらもひきかえに死を考えた。そして悲しいあきらめが肉体の苦痛をやわらげた。

病院の人達、家族、友人達の献身的な看護の為に全く奇蹟的に両眼の失明をまぬがれるのを知ったのは三週間後だった。入院後始めて数分間眼帯をはずして庭を見る事を許された。この時こそ文字通り開眼の喜びであった。二坪の中庭には一本のハツ手の木が植えられているだけであったが、それにうつる光と影は将に躍動する美しさであった。まばたきすら惜しく外をみつめていた。そして世界はこんなにも新鮮で美しいものであるかをはじめ知った。数分の後には又長い暗黒の時があった。心にやすらぎをとって色々な事を考えた。大切なもの、真実なものについて、又、むなしい事、はかない事について、結跏思惟の時が続いた。悟と運はいかないが心の眼が少しく開けて来たのかもしれない。この事は私にとっては有難いことであった。一ヶ月余の入院を終えて奇蹟的に両眼が助かり、再生の喜を胸に人々に感謝して元の

生活にかえった。

半年ほどたって世界は動乱の時代となった。健康なる若人はすべて職に参加して不幸にも傷つき倒れて行った。そして私も今から考えると身震いするような危険な作業や研究に臨む事がしばしばあった。そのような時心は冷えて冷えて牙えかえり、眼の前のあの時の流れの深い断層が黒々と横たわっているのがありありと見られた。幾度か此の断層を細心の注意と決意をもって無事渡りきることが出来たのも皆の貴重な体験のたまものであった。

二十年の文月は過ぎ壊滅にひんした我が国も希望に満てる時代となった。そして私も昨年から自由に若い人達と共に考え、語り得る境遇となった。此の間に高分子工業はたくましく成長を続け、あのカロツサーの論文集にかかれてあった物質は、はるかに多彩な装をこらして現実の製品となって百花撩乱の美を競っている。此の新しい工業の美しく、たくましい姿に接し、この仕事に従事し得る喜びは二十年昔の閑眠の感歎に通ずるものであります。

無

題

一回生 分部好孝

旧約聖書の「創世記」の一部に次のようなことが述べられている。

在りと在る神エホバは天地とその中に生きる草や木や、鳥や獣を追った後に、すべてこれらの物を支配しつつそれ自身も繁栄を持続するよう、神自身に似せて、土の塵から最初の人アダムを造った。云々

慥に我々が自然物を見るとき、その自然物はとても巧妙に出来ていることに驚嘆するであろう。そこでその驚嘆があまりにも大きいものだから超人的な者が、これらの自然物を造り出したのだと考え、この超人的な者を古代の人々は神という名で呼んだのであつて、人間が神を人間自身に似せて人間の発達せる高級頭脳によるイメージにすぎない。

と説明すれば宗教信仰者もしくは求道者からとがめられるかもしれないがこれは近代の一般教養人の共通の考えなのである。

それにもかかわらず宗教家は神の存在を理論なく認めと押しつける。理論なく認めるのは数字の公理だけであつて神の存在は何ら公理でも何でもない。

昔の人間が考えていた神というのは今では単なる普通の人間にすぎない。何故なら我々の知識の発展によつて昔には神的行爲と考えられていたすべてのものが、今や、我々人間の頭脳から産み出された機械によつてなされてい

るではないか。否、神以上の仕事を成就したではないか。合成化学の分野に於いても天然ゴムより一層耐ス力の強い、耐油性、耐熱性の豊かな人造ゴム絹より遙かに秀れたナイロンが大量に生産されている。

またある宗教では虫一匹だに殺してはならないのに頭初の聖文には、それらを支配しつゝそれ自身(人間)も繁栄を持続するとあるが、これは明らかに肉をくらい、小麦や米を食つてよいということ即ち動植物の命を断つこともよいということ認めているではないか。

こればかりではなく宗教そのものが人類の発展を阻止してきたし、現在も尚インド、パキスタン等の近代化を遅らしている。神は人類の進歩に対して嫉妬の念を抱き、己よりぬきんでられるのを嫌つていふようにも思われる。神とは極めて寛大であらざる小心者であると考えざるをえない。

以上の如く述べたが、しかし近代になってとくに戦後無神論が大きく伸びてきたのは何故であろうか。我国に於いては神の国と信じていた国家が敬輦を味わったという神力の弱み(これは十字軍の時と全く同じである)と大戦中の忙しさに信仰というものが忘れられていた、それがひきつういて現在に到り宗教に關係する時間を持つ慣習が若い人々の間にはないということと、欺くもの如き悠長な、陰気なことをやっていることが出来ないという理由によるものだと思われる。

しかしながら科学の進歩した時代といつても今も尚あのグロテスクな“くも”があのような立派な糸を尻から出して正確な幾何学的な網をはりめぐらしたり、蜂が同様に正確な六角形の個室を作つたりする本能ははたして何ものが彼等に与えてやったものか我々は知る余地がないのである。

もし神なるものが彼等にそれを与えたと仮定すれば神は何故にあのようなグロテスクな“くも”を作るのだろうか？ 神は芸術的文能のない者だとしか思えない。もし神が彼等の保護の爲に彼等を見にくくしたのだとすると我々がくもを見た時、奴等を殺さずにはいられないということを神は我々に与えたのだろうか。我々の美的感覺によつて、あのグロテスクなくもを眼前から取り去るのである。

現在ソ連では熱心に生化学を研究している。この研究が立派な成果をおさめたとすれば、人間を作り出すことは出来なくても生き返らせることは可能となるであろう。このようなことが出来うようになれば、神を遙かにリードすることになるし、宗教といふものはこの世から姿を消すことになる。なんとなれば人間が死ぬ限りいくらかの人間によつて宗教が滅せないということからである。

先輩の便り

和歌山の花王石炭につとめている先輩の堀信雄さんから便りがきた。何か感じるものがあれば幸いである。以下文面を紹介しよう。

お便り有難う。大変遅くなりました。早いものです。いつの向にやら二年兵となり、新入社員を迎える身になりました。内外の事情がのみこめるにつれて新入当時の緊張感もどうやらほぐれ、現在では毎日単調な生活を繰返しています。入社当時どんな些細なことも目新しく感ぜられますが、一応落着いてくると毎日の仕事が奥にたまらなくなってきます。唯サラリーの代りに会社に働いてやっているんだとさえ思ったこともありました。仕事が苦痛に感じられる暗の毎日が続く一時期があるのです。勿論自分の希望の領域で精魂こめて働ける人もある筈ですが、この様な例は少ないのではないのでしょうか。このような例は少ないのではないのでしょうか。世の中はそれほどあまいものではなく、大抵は自分の意思に反するのが現実だということです。

事実、僕の担当している仕事が繊維とは全く縁遠いもので、学校で覚えたことは全く関係のないことをやっています。この様なとき、毎日の生活に潤いを与えてくれるものが各人の趣味なのです。これは現実からの逃避になるかも知れませんが自分の生活を重要なものにするためにも是非必要だと思います。僕は寮へ帰って初めて自分というものを見出すのです。この時程、満足感を味わう時はありません。スポーツ、読書、音楽、カメラ、碁、将棋その他もろもろ、何でもよいのです。一つ一生の伴侶となるものをつくっておくのも悪くはないと思います。少々悲壮すぎるようですが、社会人となれば趣味が重要な意味をもつということを言いたかったのです。金はどうか知りませんが、ヒマのあるのが学生です。現在我々は金の方はまあなんとかですが、ヒマが全然なくて、好きなこともちよっと手をだしかねている現状で、学生が全くうらやましい限りです。日雇の来るのが待遠しく、日雇の午前は安眠をむさぼるのが常です。君もあと一年少々、(残念ながら)学生生活を十分満喫しておくがよいでしょう。

現在、研究所の応用部にいるのですが、ここには工織大の先輩が四人いて

繊維処理油剤 染色油剤関係で、夫々非常に活躍しておられます。いふならば工織大なくして応用部なしという所でしょう。それ故当社では工織大の評判は非常によい様です。今春一人織化から入る事になっていて、試験の成績は良かったらしいですが、残念ながら身体検査でダメになりました。やはり身体健全が第一条件です。研究所に付属して図書室があり、ここには地方としては珍しく多くの図書雑誌を備えています。文献あさりや時には気分転換のためそこで時を過しますが、ドイツ語の力がないので弱っています。やはり技術屋はドイツ語は必須ですね。(キモに銘せられた。)それから研究所の人はよく勉強します。僕らから見ると学生時代よりも頑張るようです。

京都へはよく出張し、学校へも立寄るのですが、休暇などで会えず、いつも残念に思っています。機会あれば連絡したいと思います。

夜 想

たけだ・けいじ

食欲な町工場の
狂おしい夜業が止んだ
電車も人も消えた、勝手に悪夢をみるがいい
要するに、あくせくと何にもならない一日が
もうすっかり終わったんだ。

さあ静かに夜気を吸おう
セザール・フランクのオルガンが流れる
透き通った水色の清水が流れる
ほこりのつまった、神圣のもつれた頭の中を
静かにるいりいと流れ、流れる

すると、ああ、昼間の僕は目くらだった
今やっと目がみえる、本当の僕が見える、
これが真の僕だった、心の形がよく見える
宇宙はこんなにも美しかった。

クラブ活動に関する

とりよめのなり話

三回生 高橋 宏 貞

クラブに入ればいろいろな効果がある。たとえばテニス部なら、テニスがうまくなるとか、友人ができるとか余暇の善用とか。クラブに入った人はこういったものの少くとも一つは求めたのだろう。ところでクラブをやめていく人達は、口をそろえてクラブの活動が自分の思う通りでないといつばかりで、それを変えるために自分で努力した様な様子が一向にない。私自身の経歴や友人達のそれを総合してみると、どうも一番おもしろいクラブというのは、一番いそがしいクラブのようである。一体、こういう人は、大きな口をあいて待つていけばクラブ活動が棚の上から落ちてくるとでも思っているのだろうか。自分の求めるものが得られないのなら、そういう方向にクラブをひっぱっていけばよい。そのための論争がさかんになるのはおおいにけっこうなことだ。安心してけんかのできるのが、本当のつき合いというものである。

りっぱな争いのできるのは大利口と大バカにかぎるのだぞうだ。もっともこの場合の大バカとは俗にいうクルクルパーのことではない。その中間の小利口、小バカは適当にクラブ活動をし、適当に学問をやり、適当におくさんを持ち子供をつくって適当にあの世とやらへ行ってしまおうぞう。一生に一度でもよいから、損得をはなれて全力をうちこめる仕事にぶつかった人はしあわせというべきである。少くとも大学のクラブ活動はこういう仕事のためのチャンスを与えてくれるはずだ。だが私達のまわりにいる人達のなんと無気力なことか。

先輩からこんな話を聞いた。彼がレコードコンサートをやった時、会を終わって重ハスピーカーやアンプをウンウンいつてはこんでいったが、音楽を聞きにきた人は、ただそれを見ているばかりで手をかすどころか、「ご苦労さん」と声をかけてくれる人さえなかったぞうだ。

クラブ活動はあくまでギブアンドテイクである。別に役員になっていそがしくとびまわっていなくても、協力したり、関心を示したりするだけでもりっぱなギブとなりうる。本来、何か一つの目的をもった個人が集ってクラブ

ができたのであって、その逆ではない。特に本学ではこのことをはっきりさせておく必要がある。方に近い数の学生をもつ大きな私学では、クラブでは有名教授やりっぱな校舎やその上にまたたく赤いネオンサインなどと同じく学生をひきよせるための一つの重要なモノとして援助をうけ、又それにとりなって「校威を発揚」するような方向に進むのもやむを得ないだろう。500人たらずの学生しかない本学部のクラブにはまたそれなりのゆき方があるはずだ。いたずらに他のマスプロクラブのまねをするのは自殺行爲である。

クラブのメンバーの一人一人がそれぞれの個性を発揮することこそ本学のクラブの目標はおかれるべきである。

話し合いの場を広げるために

三回生 太田 晋一

機関誌オラ3号が発行されるに当って、我々はもう一度この誌の目的と意義を再確認する必要があると思ふ。昨年夏オラ1号が創刊されて以来、機関誌の唯一の目標であった、学生相互及び先生方との“たてのつながり”が果してどれ程の成果をもたらしたか、考えてみたいと思ふ。そしてそれを考えることは、今後のこの誌の方向をあるいはかえることになるかもしれない。

機関誌はもとより、文芸雑誌でもなければ暇人の雑文雑誌でもない。全学に共通する問題意識を持った“生活と意見”の集録でなければならない。それによって一回生から四回生までの中に同じ問題に対する処理の仕方の相違やら意見の相違やらを通して“たての結びつき”を得ようと試みているのである。これまでの機関誌について言えば、まず、読み放し、というのが多かったし、又一面それは仕方のない事でもあった。機関誌に載った文に対する反論や意見など当然出てよい筈なのだが、考えてみると、機関誌が年に2回や3回の発行という長期の間隔があるために、そうした反論が無意味になってくるということは十分にあり得ることである。私は我々の生活と意見を載せるために、年に少くとも4回は出したいと思っている。一方こういう意見も私は耳にした。即ち、「粗雑なものを多く出すより実のあるものをゆつくり作った方がいい」と。しかし機関誌の目的を考えてみれば、現在の生活と意見は、明日はもう変わるかもしれない。機関誌は趣味で作っているのでは

ない筈である。可能な限り、多くのチャンスを与えるようになることが望ましい。

昨年度末、編集部で試みた学生懇談会は、機関誌の目的達成に大きな役割を果たしたと思う。4回生と下級生との討論の様な形であったが、実際の「話し合いの場」として我々に与えた効果は大きい。本年も是非続けて開きたいと思うのである。今年入学した1回生諸君はまだこの大学の特長を理解するには至っていないであろうし、どちらかと言えば真空地帯にいるといえる。やがて徐々にこの大学の体臭を身につける様になるにつれ、必ず一つの自己の生活態度を打ち出さねばならなくなってくる。孤独な魂が如何に無力であるか、それを知る必要がある。機関誌の生まれた意図というものは、我々相互の連帯感の獲得にあるのである。単なる書くことの好きな人達の「あそび」や「物語り」では決してないのである。

機関誌は本当に全学生のものでなければならない。編集部の所在も、もつとすっきりさせるべきである。現在では学生委員と有志若干名がこれに当たっているが、どちらかと言えば、機をみて発行するという有様で原稿募集や経費の面など、その時によって浮動している状態である。現在の全学生と先生方とが会員となって会費を払い、機関誌を無料配布するという建前は妥当な方法だと思われる。

ともかく、こうした機関誌にとって、発行ネ3号くらいで成果を云々することは、先ばしりの感なくもない。しかし、この誌の創刊号で約束した目的を達成するためには、もう一度、意味の確認が必要ではないかと思うし、又新入生諸君には、この誌の目的を本当に理解してもらいたい。

編集部紹介

C4 鈴木国夫

C3 太田晋一

C3 吉田周司

C2 荒谷善夫

C2 竹田敬司

C1 分部好寿

C1 竹迫雄司

神との対話

三回生 近藤 洋

— 「今日は神様、お忙しい所をわざわざどうもすみません。

神 「いや、今日は君達にすこし言つときたい事があるんじや。大体この頃の学生は何でもよく知つとるが、何にもよう考えん。お前達若いもんがマス・ゴミの波にのって週刊誌の受け売りの知識で満足していてええのか、わしらの若い頃は-----」

— 「いえ、それはもう、あなたは神さまですから」

神 「うん、そうじゃったな、それにこの学校の生徒はなんじやな、専門以外の事は何にも知らんな。例えばじや、文学、芸術、それに国際問題に至るまで満足に自分の意見を述べる輩の出来るもんは少ないわい。だからお前と話していても面白くないわい。」

— 「これはどうも恐れ入りました。神さまにはご気嫌うるわしゆうないようですが、何か腹の立つ事でも----」

神 「そうじや、大体この頃の人間は原子力、原子力というて神を恐れぬにも程があるわい。IRBMにジュピターなんていう名前をつけくさる。神へのボウトクも甚だしいぞ。そろは鬼わんか」

— 「ごもつともです」

神 「腹が立ってならんわい。近藤、お前は二回生のときよう実験をサボツとったが、この頃はどうじや」

— 「はい、この頃は凄く熱心にやっております」

神 「ところで、お前は麻雀が強いそうじやな」

— 「はア、この学校ではぼくの右に出るものはない位で」

神 「その調子で勉強もせにやあ、あかんぞ」

— 「いえ、勉強の方も-----」

神 「うそをつけ。お前の机はホコリだらけじやないか」

— 「あッ、神さん知ったはったんですか」

神 「あたり前じや。それから聞くが、お前達も酒は飲むのか」

— 「え、大好物です。」

神 「どんなものを飲むのじや」

— 「そうですねえ、カクテルならマンハッタンですね。ウィスキーは
ジョニーウォーカーのストレートをぐつと……」

神 「うそをつけ。せいせいおごってサントリーの白じゃろう」

— 「あ、よう知ったはりまんア、知ってるくせに神さんも人が悪い……」

神 「これ、神は人ではないぞ。口を慎しめ、それからお前はクリスマスに
なると街でグデングデンになつとるが、クリスマスは何か知つとるが。」

— 「そんなもん位知ってますわいな。バカにせんといてんか。サンタクロ
ースの生まれた日ですがな」

神 「アホッ、お前みたいなのがいるからこの世がダ落するのじゃ。さては、
昨年のクリスマスの晩教会の前で大声で『アッ教会でクリスマスやっで、
やがる』と言つとったんはお前じゃろ」

— 「イエ、滅相もない。神さん、そんな事言わはつたら、ほんまみたいに
聞えますがな」

神 「お前こそそんな事言つたら、嘘みたいではないか。まア酒の事はこの
位にして、お前は女は好きか」

— いえ、女嫌いでおってますので」

神 「うそをつけ、酒に煙草に女好きとちやんと顔に書いてあるわ。それ
にして人間の世界ではフラトニックな恋というもんはありえんじやろ
うな。恋愛は性慾の詩的表現みたいなものじゃろう。お前らの世界では、

— 「はア、芥川さんもそんな事言うてはりましたが……」

神 「そうか、わりの眼には狂いはなかつたな。どうじゃな、お前も女の子
の前に行くど、威風堂々と……」

— 「神さま、そんな事書いたら倫理規程に引っかかりますので」

神 「うん、人間の世界はきゆうくつでかなわんな。ハッハッハッ……」

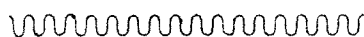
— 「神さんも相当、助平ですねえ」

神 「こらッ、何という口をきくかつ」

— 「はっ、恐れ入ります」

神 「もうよい、まアお前達も、いつ戦争が始まるかわからんから、今の
うちにせいせい遊んでおくのだな」

— 「はッ、大いに遊ぶつもりであります。今日はお忙しいところすみませ
んでした。あッ、神さん、ちよつとお待ち下さい、今、酒の用意させて
おりますから」



天災は忘れたころにやってくる

繊維化学教室における事故のあれこれ

稲野光正

ある人が、実験室は最も危険な場所であり、また同時に最も安全な場所でもあるといっている。

実験室ではこわれ易い器具、引火性物質、爆発性物質、毒性物質をどうしても取扱わなければならない。実験室内にあるすべての薬品は何らかの意味で、どれもこれも危険薬品である。このように実験室は多数の潜在的な危険があるにもかかわらず、実験者の危険防止に対する十分な注意と認識とで実験室より安全な場所はどこにもないという安心感が抱けるのではなからうか。

小さい火災や爆発のような小事故は実験室ではしばしば起る。われわれの繊維化学教室の実験室でも過去十年程の間にいろいろな事故があった。しかし同じ場所で同じ事故を二度繰返す程馬鹿げたことはないし、どんな事故でもわれわれが学ぶことの出来る貴重な学科であって、過去の事故から、われわれはどのようにして安全に実験を成すべきかを考えることもあながち無意味とは思われぬ。そこで繊維化学教室で起った二、三の事故を振り返って見ようと思う。

実験室の事故の中で、最も大きい被害を受けるのは爆発である。私の実験室でも窒化銀による爆発事故が一度あった。昭和29年講座廻り実験で、当時三回生のS君が、作りたてのトレンスの試薬にかラス棒を入れたとたん爆発した。目に液が飛び失明はまぬかれたが、全治するのに三週間程かかった。原因はS君が固型の苛性ソーダと硝酸銀とアンモニヤを同時にビーカー中の水の中に加えたため、発熱してアンモニヤが蒸発し、銀の窒化物 Ag_3N がアミド $AgNH_2$ の爆発性化合物ができたためと考えられる。これは *flaming silver* と言われ、雷酸銀 (*silver fulminate*) $AgONC$ とは全く別のものであるが、僅かの衝撃でも爆発する物質である。たいていの書物にある通り、硝酸銀と苛性ソーダを別々にとかしてから加え、酸化銀の沈澱をつくり、アンモニヤを一滴ずつ加えて酸化銀を溶解させていたなら、恐らく

このような事故はみなかったであろう。銀鏡を作る時でも、少し無精をする
と Ag_2N や $AgNH_2$ が析出して大失敗をすることがある。銀鏡は通常アンモ
ニヤ性の硝酸銀溶液に、還元剤たとえば酒石酸塩溶液をまぜ、この液からガ
ラス上で銀を析出させるのであるが、アンモニヤ性硝酸銀溶液の濃いものを
保存しておく、アンモニヤの揮散によって *fulminating silver* が生ず
るので、注意する必要がある。アンモニヤ性硝酸銀溶液は長時間保存するの
は危険であり、試薬の残りは塩酸を加えて塩化銀にしておくことが必要であ
る。爆発といえばエーテルも危険なものの一つである、この爆発も二度ほど
あったように記憶するが、原因は過酸化物のためであることは恐らく誰でも
知っていることであるが、不注意か無謀のために時々見聞する爆発である。

エーテルは酸素やオゾンの存在で自動酸化により激しい爆発性の過酸化物
を生成し易い、このために蒸溜しようとする無水エーテルは常に爆発の危険
を持っている。蒸溜中に過酸化物が蓄積して、最後に猛烈に爆発を起す。貯
蔵中にエーテルの自動酸化を防ぐためには、酸化防止剤を加えればよい。ハ
イドロキノン、ジフェニルアミンが良く用いられる。活性炭あるいは活性酸
化アルミニウムと接触させて保存しても防止できる。エーテルに水を加えて
おくことも推奨されている。しかしいずれにしてもこれらの防止剤は過酸化
物の生成を防止するだけであつて、既に存在している過酸化物を破壊するも
のでないことは覚えておかねばならないことである。もし過酸化エーテルが
既に含まれている時は酸性の硫酸鉄溶液で破壊すればよい。数分で過酸化物
はなくなる。その際エーテルは過酸化物の分解物であるアセトアルデヒドと
酢酸を含むから、これらを除くために、クロム酸溶液でよく振り、ついで苛
性ソーダ溶液でアルカリ性にしてから、炭酸ナトリウムを入れて蒸溜す
ればよい。常識的な分りきつたことは読んでいても書いていてもごまらい
けれど、やはり時には思い返して見る必要もあろう。

実験室内では可燃性物質がしばしば用いられる。そこでなんといつても一
番多いのが火災である。今の繊維化学教室は鉄筋の立派な実験室であるため、
殆んど心配ないが、5、6年前近の木造実験室当時は、一寸したホヤにもお
びやかされたものである。火災の原因はたいていが不注意の一語につきる。
沸騰石を加えないで蒸溜を始め、あわてて加熱した液体に沸騰石を入れたた
め突沸して引火し、大火傷をした人があつた。次の例も一寸した不注意か
ら起つた事故だが、ある実験室で数リットルのメタノールを蒸溜していた際
冷却器の水が止つてしまつていたのに気づかなかつたため、引火して木造実
験室の天井が火が上つた。かけつけた数名の人々の沈着な消化活動により大

争に至らなかつたのは幸いなことであつた。実験をやるのに注意し過ぎるといふことは決してない。不注意、怠慢、無謀な実験者と他人を障害することを決して忘れてはならない。

昭和27年の夏、今迄で最も大きい被害を伴つた事故があつた。当時の4回生M君が、ホリ酢酸ビニルの溶けていたメタノールを蒸溜中、突然引火し、天井迄火柱が上つた。横で見ていた数名の同級生は、あるいは窓から、あるいはドアからとびだしてにげた。後で聞くと、M君は半ば無意識に燃えているフラスコを消そうと手に持ったそうだ。一瞬の後にフラスコが割れ、彼は全身にメタノールを浴び実験衣が燃え出し、その上不幸にもホリ酢酸ビニルのため、ネバネバして容易に消えず、全身火だるまとなって隣の部屋にころげこみ、居合せたH教官に消火器で漸く消してもらつた。間もなく救急車のサイレンが聞えたが、全治何カ月かの火傷を受けた。M君は今でも冬になると手足が痛むそうだ。

最後にこれは私自身の体験であるが、昭和25年卒業論文実験をやつていたときのことである。同僚のI君と一緒に、ある物質を遠心分離していた。

当時は現在のような防壁のある場所が無かつたので、実験室の中央で扱つていた。廻転につれて遠心分離器自身が床の上を動くので、A君、I君、私の三人が交代に上から押えつけていた。おかしい音がするなと思つたとき、ドカンと、ものすごい轟音と共に、中の円筒が遠心分離器の横腹をつき破つて部屋の隅までとんで行つた。偶然つき破られた箇所が押さえていた二人の丁度中間であつたので、二人とも無争ではあつたが、音を聞いてとんで来られたO助教授に「速度を計算してみろ、ピストルの弾より早いぞ」とおどかさされた。押さえていた誰かの腹にでも当つていたらとゾーンとしたものだ。この事故は遠心分離器が戦時中の粗悪品であつたことも事実であるが、取扱者の不注意が皆無であつたとは言いきれない。事故の発生は平均の法則には支配されないものである。「天災は忘れたころにやってくる」とは寺田寅彦の至言であるが、実験室における事故は不注意と無謀のものには幾度でもやってくる。無謀は勇氣とは何の関係もないことを肝に命じなければならない。事故は進歩の必然的の代価ではないし、注意は決して無価値のものではない。再びくり返りかえそう。

「注意しすぎることは無謀であるよりも良い」と。



—— 隨 想 ——

フリードリッヒ大王

—— 一回生 —— 加 藤 肇 彦 ——

昔、プロイセンにフリードリッヒ大王という王がいた。彼はベルリンから程遠からぬ所に一つの離宮をもっていた。彼は静かな所で仕事をするために度々そこへ赴いた。ただ残念なことに、その近くに水車小屋があつて、その水車の音がうるさくて仕事が手につかない。そこで大王はある時、水車を買ひとろうとしたが、その持主の粉屋は売らないという。そこで大王はその粉屋を感したが、粉屋は「法律は私を保護してくれますよ」と答えた。大王はこの大胆さを買つて水車をそのままにして粉屋と友達になつた。これは我々のドイツ語の *Lesebuch* にあつた話である。小生はこの話をたしか以前小学校の社会科の教科書で見たことを思い出して調べてみた。するとその本では大王が宮殿の設計図を見て、一部におかしい所があつたので、そのわけを家来にたずねると、しかじかこういうわけであるといつたので、大王が家来をつかわしたといふことになつていた。

又、ある日小生は書店で「帝王」という本をみつけた。その本には、アルノルという粉屋がある伯爵の土地を借りていたが、その隣の土地の持主が、養魚場を作つたために粉屋の所へ水がこなくなつたので、粉屋は伯爵に地代を払わなかつた。そこで伯爵が強制執行をしようとしたところ、1775年8月粉屋の妻が大王に直訴した。そこで粉屋は、大王の指示に従つて反訴したが却下され、養魚場閉設に対する損害賠償の訴えも却下され、一方伯爵の方の訴えは入れられ、粉屋は地代を払う義務があり、水車は公売に附されることになつた。そして水車は落札されたが、粉屋は立ち退かず、ポツダムへもう一度直訴したが又敗訴になつた。そこで大王はその事件の再審を命じたところ、最高裁判所は「朕フリードリッヒは、原判決を正統と認める」という通達書を発した。それを聞いたフリードリッヒは、「朕の名前を不法に使つたといつて怒り、粉屋の正統性を説き、最高裁判所の法官達を処罰した。そしてこのことは列國の啓蒙主義者の賞讃を博した」と書いてあつた。初めの二つの話は確かに同一の話で、後の一つは多分相当時代の下る別の話であろう。なぜならば同一の話の変形としてはあまりに前の二つとかけ離れすぎてゐるからである。そうして前の二つに出て来るベルリンに程遠からぬ所とい

うのはホツダムを指し、離宮といふのはここにある名高いサンズーシー（無憂宮）を指すのだからと思う。サンズーシー宮はノクム五年に造営されており、初めの二つの話はほぼこの時期にあけると考えられ、そろそろすると、三番目の話とは30年時期がずれるのである。いずれにせよ、これらの話は啓蒙君主としてのフリードリッヒ大王の英明さを示す語りぐさとなっていることは確かである。それはさておき、彼フリードリッヒ大王は当時興りつつあったフランス啓蒙主義の心からなる傾倒者であり、幼少のころからフランス人の教師につき、国粹主義者の父とはことごとくに反目し、終生ドイツ語が満足に使えず、フランス語を常用したという。サン・ズーシーというのもフランス語であり、この宮殿は大王が自分で設計し、クノーベルスドルフが建てた。そこにはヴォールテールの部屋や、大王の臨終の部屋もあり、ロココ美術の精華としてその華美の美を誇り、フランスのヴェルサイユと対抗して、18世紀ヨーロッパ文化の一中心であった。現在では東独に属し、庭園は公園となり、内部は一般に公開されているそうである。ともかく大王がでてからのドイツは政治面、文化面において飛躍的に発展している。カント、ヘーゲル、フィヒテ、シェリング、ゲーテ、シラー、ベートーヴェン、ウエーバー等は、皆彼より少し後の時代に出ている。彼こそは大王の名にふさわしい人物であった。

思いのまゝに

—— 三回生 荒谷善夫 ——

僕の自己は、いまだ全然形をなしていない。従って極めてまがりやさい自己である。しかし、若い僕にとっては、それは当然のことと想っている。従って僕の考えることは極めて矛盾に充ちたものである。

「彼が性行を知ろうとするならば、先ずその親しく交わっている反を視よ」とは非常に味のある言葉ではないか。水は器の方円に従ってその形を変える如く、友の善悪は直ちにその感化をわが性行の上に及ぼすであろう。即ち友は私の鏡であり、我は友の鏡である。我の半面は確かに朋友の人となりの上にも見え、朋友の反面は我が性行の一部となって現われるであろう。笑う時に共に笑うのみがその友ではない。真の友は悲しみある時に、涙をもわかたねばならない。あゝ思えば愛きは真の友である。

一（無
れてお
ると、
の話は
ている
りつつ
フラン
ン語が
のもフ
フが建
口ココ
抗して
園は公
出てか
、ヘー
バー
しい人

○去る連休の日、敦賀にいた。新緑に包まれた日本海の海岸は実に美しかった。青い海と真白い砂のコントラストは淡の程印象的であつた。その真白い砂の上に横たわつた僕の目に映つたのは、波山と白雲であつた。

波山は生真面目であつた。白雲は燃えるが如くであつた。波山はげに波山の如く悠遠であつた。沈着であつた。重々しかつた。白雲はげに白雲の如く霸気があつた。活気があつた。浮々しくあつた。波山は思案的にして、しかも進取的であつた。これが彼の短所にして、又長所であろう。

白雲は進取的にしてしかも思案的であつた。これが彼の短所にして、又長所であろう。波山はやがては紅葉の美を飾るであろう。白雲はやがては、桜と咲きほこる如くなる。幸い、僕に友がある。何んぞ紅葉と桜とに進まずにおこうか。

○時は無限である。そしてあらゆるものを支配している。然るに限りある人の生涯において、我々は無限の時を利用することは不可能である。

力も又 無限である。然るに、これは利用すればする程、我々に真の幸福を与えるものである。而して力の所有者となるには、ただ努力あるのみである。努力を持續するならば、我々は必然の結果として、何らかの力を獲得しえる。

偉人と呼ばれる人々が、その死後、尚、不死の靈をもって時の続く限り永久に生き得るのは、その短い生涯において、無限なる力を豊富にすべく努力した結果ではないか。自己のベストをつくし、生きるべく努力するならば、希望と歓喜は前途に輝くであろう。

まことに僕らは努力せねばならぬ。努力を停止したところに真の人生はない。即ち既に死んだのである。

○僕ら自身が決定し、実行することには限界がある。思うことでも、伝達することでも同様だ。しかし僕らはその限界に達したか。否それならば達しようとしなければならない。ならぬことをならそうとするのは人間の当然ではないか。

○現在僕は如何なる宗教も信じない。既成宗教のいう神の存在を信じないからである。

先日のことだつた。体よりも大きいパンのかけらを引っはつてホクホクで単に帰りかけていた蟻がコンクリートの上で人間の下駄に上がり、あえなく最後をとげてしまった。その瞬間、僕はハッと神への疑念を感じた。神はなぜ人間の救済のみを独善的にとり上げるのか。人間は、この大宇宙の中では一点のちりでしかない地球上に、たまたまその生存条件が整つて発生したも

さい自
る。従

を視よ
変える
即ち友
りの上
笑う時
わかた

のにすぎないではないか。それが単に正史的に生成して来たものなのである。既成宗教の人間中心主義は巨大な演劇性を有しているようである。

○僕は未来における社会主義社会の実現を信じている。その到来は必然的でさえあると思う。正史上様々の社会形態を通過してたどりついた現在の資本主義社会が永遠的な、最高最上の社会形態であるとは、どうして信じられよう。修正資本主義なるものが示すごとく、この発展への胎動は現在既に感じられつつある。

しかしながら、「各人の能力に応じて各人から、各人の必要に応じて各人へ」（マルクス）の如き高次に昇華した共産主義の実現は、如何にして可能か。現在のところ、僕はこの可能性を楽天的には、信じていない。

○“資本主義的人間”の罪悪性は、オーにその搾取にある。近代経済学は、本質的には、これを根本原則としているようなものである。オーはエゴイズムであり、次に、侵略性である。金銭万能も、その一つであるかもしれない。

これらはすべて、人間の原罪的エゴイズムのもたらす厄介な問題なのである。この利己性こそは、彼らの最大の弁明武器なのである。彼らは、この利己性をこそ、人間性に深く根ざしたものだと言う。思うに、それは好色家の弁明にも似たもののようなのだ。

ところで、ここに非常に興味のある事実がある。それは資本主義の発達した国が、例外なくキリスト教国であるということだ。上に述べたような“資本主義的人間”が祈りの言葉をもって神に呼びかける図は、一体何であろう。資本主義とはキリスト教に対する最大の裏切ではないか。

○恋愛は、心の底から他人の存在を認めるところにおいて、はじめて生まれるものであると思う。二つの肉体も心も、少しでも自己主張を、どこまでも、押し通そうとするならば、二つのものは、たちまち、無限の彼方に去るであろう。

しかし、だからといって、恋愛の中で自分というものが、内容を失ってしまうのだとは考えられない。

即ち、恋愛とは、決して、二人の単なる妥協の上に成立するものではない。それは、二つの心が、各々、自分自身の中から出て行き、相手の心の深底にまで達するといふ心のはたらきなのである。互に他の存在を、その根底からうけとめるところに、二つのものは合して、一つとなるのである。勿論これは、肉的作用においてもその次元こそちがえ、同様なのだろうと思う。

○大宇宙の驚嘆は、今さら、僕のいうところではない。思えば不思議にして驚くべきこの世界に何の役割を買って、僕らは生きているか。毎日を平然

として
ある日
星のみ
し、与
なは
宇宙的
僕は
の正め
になる

原
発

として月に泣き、花に笑いの、めまぐるしい日課をくり返している。それがある日には満足だと思ひ、ある日には恐ろしいとも思ふ。こんなことは大宇宙のみえざる統治者に任じて、僕は与えられた時間、この生命を素直に維持し、与えられた仕事に感謝し、働いていけばよいのだろうか。否、そうではない。誰かもいうように、僕たち人間は生命に目覚め、自己の受けたる生の宇宙的意義に驚くことから始めなくてはならない。

僕は人間の生を信じている。深く深く人間を愛しようと思ふ。たとえ、そのために、罪の意識に苦しまねばならぬことがあつても、これを人間が人間になるための至上命令ではないか。ああ、僕は、何よりも人間になりたい。

おわり

別 離

鈴木溪太郎

太陽と砂塵の間

トラックは疾駆し

兵士は眠る

貴女との別離の

さりげなき顔焼は

アルジェリアの灼熱の刻限

㊦ 次 号 予 告 ㊦

原稿募集 内 容……………機関誌の目的に適しいろの

形 式……………自由 原稿用紙2~8枚

締 切……………9月20日

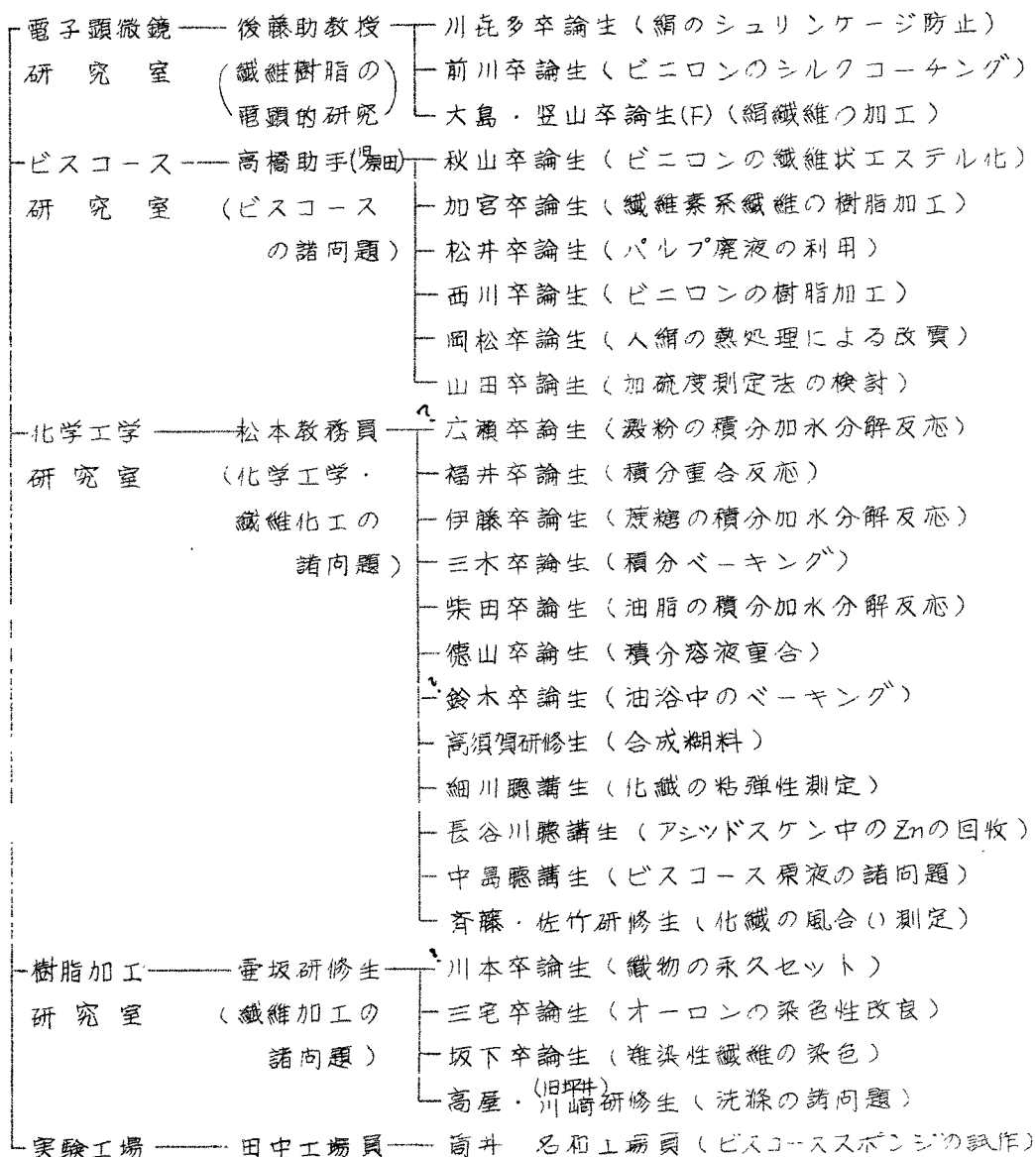
受 付……………学生委員及び編集委員

発行予定 10月初旬

岩崎研究室のプロフィール

—昭和34年度—

岩崎教授を擁して、相変らず学部一の大世帯を誇り、多方面に活躍している岩崎研究室のメンバー構造をまず紹介しよう。



常に数多くの優秀な研究成果を手みやびに *Able Engineer-Gentlemen and Ladies* を社会に送り出している岩崎研究室のお家芸の主なものは、工学士をつくるための化学工学的訓練である。在来の我が国の化学者達には、研究の工業化という点において無能力な人が多かった為に、自他共に如何程裏としたか知れない。研究を実験室から工場へ移す時には必ず *pilot plant* を建設し運転せねばならないが、これには化学工学的に熟練された化学者が参加して始めて成功するものである。工場の化学技術者の日常必要なものは化学工学的訓練だけである。又研究室の化学者でも同様に化学工学的手腕は必要欠くべからざるものであつて、実験の速やかな成功もこれに伴う。われら繊維化学教室の出身者が社会に出て、最も新しい技術、ないしはこの新しい技術をこなせるだけの基礎知識を備えて古い技術者達を圧倒し、大いに世の中に貢献しているのは、要するに彼らが学生時代に化学工学的訓練を受け、優れた腕をもっているからである。これらの特色を益々養成し、一層向上させ、より一層工学士らしい工学士を育てあげるよう、教室員一同が率先垂範して着々歩を進めている。

新入生のために繊維化学3回生の実験について紹介すると、これは講座別のシステムをとっており、高分子化学(町田研)・網糸化学(貫志研)・合成有機化学(浜村研)・化学繊維Ⅱ(相宅研)・化学繊維Ⅰ(岩崎研)・化学工学(岩崎研)と6課目の実験を6~8人がグループになって1講座約4週間・講義のないときはいつでも実験をして、常に腕を磨いている。このうち岩崎研担当の化繊Ⅰと化学工学の両実験について一寸紹介すると、前者はパルプからレーヨンまでの一連の知識と技術を *pilot plant* を駆使して習得し、後者は流体、伝熱、蒸溜、乾燥等から、製図、機械工作やパイピング等までの実験実習をして、化学装置を自由に使える様な腕を作ろうと云うのである。そして両者の共通点をあげると、それは実験数値の処理整理法の習得にまで及ぶ工学的訓練のきびしさである。

又一番愉快な卒業論文生について述べよう。岩研では、毎年三回生の終りに所属とテーマが決まり次第、先輩四回生より種々の引継ぎをし、四月の実験開始までの間に文献調査や実験計画をし、実験開始と共に週間報告と計画書として能率よくどんどん実験を進め、卒業までには何とかモノにしてしまふ。中には、学会に発表されるものもある。岩研の運営機関に雑誌会がある。これは単に毎週開かれる文献調査の発表のみでなく、ハイキングや工場見学、旅行といったことまでこれが企画運営するのである。毎週開かれる定例の雑誌会は文献の紹介が殆んどであるが、時には8ミリやカラーライドの映写

研究室紹介

もあ)、お茶とお菓子を前にしてなごやかな雰囲気にもまれて、教室員、研修生、卒論主らがダゲる所である。誰方でも希望者は前もって申し出て下されば歓迎しますから、どしどしおいで下さい、卒論主はまた、野球に、囲碁・将棋に、アミダに、と毎日楽しく遊んでいる。

今回は特に教室員・研修生について一通り紹介しよう。

まず岩崎教授はわが国のビスコース人絹の先駆者で、云わば重要文化財的存在である。最近「積分反応」と云う新理論を打ち立てられ、ビスコースの三反応、繊維の樹脂加工におけるベーキング、その他すべて化学反応に應用しつつある。御大がヨットの名手であると云えばちよつと意外に思うだろうが、四、五年前まではよく卒論主と天気の良い日には琵琶湖へ行かれたものだが、この頃は専ら、俳諧の道に入られた様だ。

後藤助教授は古い先輩に當り、絹の改良と繊維及び樹脂の電子顕微鏡的研究に専念されている。彼またわが国電顕の先駆者である。

後藤先生の卓球は一流である。これにはふしぎなジंकスがあつて、関西地区国立大学職員体育大会に過去三年先生が監督された時には、必ず群雄を返りぞけ、優勝すると云うのである。

また美声これまた天下一品で、汝いノドはコンパのときにでもおきかせ願うでしょう。

次にファイター高橋教官。旧姓原田。古い研修生らは「原田さんは何処ですか」なんて呼びかけるもんだから、三国生らはよくまごついて、目を見ても通らなくても分らないという様な笑話もある。七歳実験の世話をしておられ、専門はビスコース一般であり、特技に熔接がある。登山・スキーのベテランである。専門時代のC科オ5期生。

その次がスーパーマン的人物松本君。彼は化学工学実験の世話をしているが、大学C科オ2期生で、戦中派である。工場の屋上に蒸溜塔を組立てたのも、中庭に噴水をつくったのも彼の仕わざである。消防署から監視員が来た時に弁解役をするのも彼の役である。彼は繊維学部危険物取扱主任と云うことになっている。特技に速読とガリ版切りがある。彼もスポーツマンである。野球、籠球、スキー、スケート、登山 etc. と多芸だが、まあ下手の横好き級位のところかな。

研修生の古参に壺坂君がいる。彼は大学オ3期生である。芦屋のクリーニング屋さんの副社長。研究の方も専ら繊維類の洗濯とか加工の方面。彼もスポーツマンで、野球、サッカー、スキー、スケート、登山、ゴルフ etc. 中でもスキーは指導員クラス。

美人
三。日
夕夕夕
あつと
老な橋
一渡こ
高橋
先主の
基ノ
買のダ
大モ
なビス
五月、
そごあ
狂至
さして

最新
研究室
三三
三分の
かした
して、
夕夕内
そす

美人研修生の川崎さんは、極く最近結婚したばかりの堀川高校家庭科の先生。臼井坪井。奈良女子大出身。家政高校の先生である高屋研修生とおセンタクの研究中で、家政学会にも発表された。

あと二人の女性研修生、斉藤・佐竹嬢は藤川洋裁学園のデザイナーで、前者は専ら高校の講師でもある。女子学生の諸嬢ら、もし洋服をつくりたいなら一度このお二人に御相談されては如何。

高須賀研修生は、N化学工業の社員。今春F科卒業の先輩で、先日の岩崎先生つテレビ出演で益々有名になった合成糊料の研究をやっている。

堀川・長谷川、中島の三聡講生はいずれも東洋レーヨンから派遣の上級社員のだまごさん。

大先輩の田中さんを中心に筒井さん、名和君の三人が現在取組んでいるのはビスコーススポンジの中間試験生産である。これは受託研究のシステムで毎月ノルマの生産をあげて受託者に渡している。田中さんの塗作りは仲々有名であり、中庭の花壇の総取締役。

昨年度の紹介とダブったところも二、三あるが、まあ今回はこれ位で勘弁させてもらおう。

—イワケン生—

町田研究室

最初に町田研究室の現在の内容を紹介する前に、長年つちかわれつゝある研究室の伝統を述べてみたい。

毎年の卒論生がモットーとして来たことは、最後の学生生活をおゝらかに自分の研究と社会勉強に取り組むことである。それも教授陣の適切な指導を生かした自主性に富む学習法である。その合間合間に学生としての我儘を生かして、スポーツ及びその他の娯楽をたのしむ。以上のことを念頭において個々の内容を紹介する。

先ず教師連は温厚な人格者なる町田教授を筆頭に、適度のユーモアをわざ

研究室紹介

まえと研究熱心の内野助教授、現在目だたないながらも若き頃は豪傑と名の通った稲野助手、研究又は酒にとり組んだらてもでも動かぬ町田研修生、と多士齊々。

それらに比べて今年の卒論生は至って内気なまじめな学生ぞろい。教師連の当てはずれ、おいおい教育を受けつゝ、次の個々の実験に取り組んでいる。数年に渡るエチレンイミンに関する研究は、天倉、林、両卒論生が行つており、すでにエチレンイミンが合成されている。

この研究室ではなやかな色どりをええる染料の研究は、田中、下村、渡辺各卒論生が、臭気を放らつゝ、これも連日研究に取り組みつゝある。

最後に *glycidic ester* より *aldehyde* を合成して、ビニロンのアセタール化を行う研究は、森岡、高橋、両卒論生の研究テーマである。

今年残念ながら、ヘミセルの研究がはづされたが、この方面でも毎年つ卒論生で、立派な成果を挙げている。

町研伝統のスポーツ、バドミントンは、内野助教授の好指導を得て、最近めきめき卒論生の晩も上り、諸君等の参加も期待している。そして忘れてはならないことは、今年から倉橋研修生が加わり、野球もぐんと強化された。

今年もどうか、繊維化学科の諸君、大いに仲良く、勉強に運動に頑張ろうではないか。

— 森 岡 記 —

貴志研究室

住みなれると気にもならないが、一寸独特の臭のする貴志研究室は他の研究室が各々持っているのと同様に、その雰囲気或いは感じは特性のあるものである事は申すに及ばないのであります。

昨年は卒論生がなかったので、本誌にも紹介されなかつたので、此の機会を利用して大いに語りたいたのでありますが、この紙面にも制限があるので、し料諸氏が貴志研に接するにつけて自ら吸いどっていただけたら幸いです。

ミッソの *Outline* のみを *Scene* の許すかぎりで紹介したいと思ひます。

善悪の塊のような貴志教授を筆頭とするそのメンバーは、貴志教授の九大退学に伴う後輩である武内講師、堂々とした体軀は全て *fight* で出来上つてこの感つする先生であります。九州男子の意気はおだやかな表面の裏に雄々しく備えておられるが、屈たたくなくわれわれ学生と村合っていたゞけます。

諸丞員として、S科出身の竹田さん、武内先生と同様一子のパパで、武内先生とコンビ宜しく、われわれの指導者であると同時に、よき人生学のアドバイザーでもあります。

更にS科出身の有馬さん、黙々と実験にはげみ頑着っておられる。

さて卒論生であるが、山田進一君、通称シン公と呼ばれ、ユーモアとペーパースを有する面白い男であります。音楽と散策を唯一の趣味として、余技としてスポーツとドリンクングを楽しんでいるようです。

山田君の他の一人はこの拙文を筆にする私、静かな貴志研にありて異色の裏馬である様です。

ここでメンバーの紹介ではゞ大体の空気を感じとっていただければと思ひますが、全体的な貴志研は、当然の事と云えども貴志教授の人柄と大体一致することになります。前に記したように貴志教授は実々誠実で善悪の塊のような人柄の持主で、これが教室全体に反映して、腰柔かいおだやかな雰囲気につつまれています。大抵の研究室の息抜きは、ドリンクングを主としたコンパである筈だが、貴志研ではひざを付合せてお茶とお菓子をつまんで、硬軟と混ぜて話合うことになっています。こういうところにも、この貴志研の特色でもあるようです。

こゝで付け加えたいのは二階で隣合っている町田研究室とは親類が隣合せたような関係で、全ての桌で交流しており、協調性を大いにもつ貴志研であります。

以上、貴志研のメンバーを中心とした *outline* であるが、蛋白質化学を研究して、ともすれば斜陽的に偏見されがちの蛋白質繊維に化学的メスを加え、一歩一歩頭目ざましい化学繊維との相互関係を究明せんとして、益々他の研究室と共に前進しつつあるのであります。

最後に各々の研究中事項を挙げておきます。

○貴志教授、武内講師、有馬

「栄養の相違による蛋白質の質的変化」

現在までの定説をくつがえす注目すべきもので、昨年毎日学術奨励賞を受賞したものである。

○竹田副手

“蚕に対する *Vitamine B₂* の添加量とその成績及び含量変化”

○山田進一

“蛋白繊維のグルタミン酸及びアスパラギン酸の成分量変化と染色性の相違”

○白尾三樹

“蛋白繊維におけるシスチンの成分量変化とその染色性の相違について”

— 白尾 三樹 記 —

浜村研究室のスケッチ

新築をほこる繊維化学教室の面側、古めかしいが、青々とした若葉に周囲を取まかれ、一見異国風のな、じっくり落ち着いた感じの研究室、それが当研究室である。

本名、教養教室オキ講座、又の名は有機合成教室でもある。

有機化学を担当されている浜村教授を知らない人はもう殆んどないだろう。我が校随一の謡曲の大家。白髪にベレー帽。がっしりした身体は学生時代にボートをやられたためとか。先生に接する時、何かしら新しいものを求めてやまないという印象を我々は強く受ける。

現在、有機化学はあらゆる化学工業のみならず、他の産業の最も基礎的学問であり、従ってその応用範囲は非常に広い。

この化学実験の興味を我々に見覚えさせようと、いわゆる産婆的存在として、林屋、内藤両先生がおられる。

林屋先生は、当研究室きつてのファイター・マン。我々と話されるときは真剣そのもの、といっても冗談もたんまりとばすなかなか親近感の深い先生。

実力の真価はあまりよくわからないが、テニスの名手でもある。

一方内藤先生から受ける印象は、ひげすらで如何にもこわそうであるが、その逆、親切で、常に甘い夢の持主。三回生の学生実験では、些細なことまで懇切に指導することに余念のない人。フェイス・バリューということが如何に愚かであるかということの典型的例である。

卒論の実験は、先ず、朝、先生等とお茶をすゝりながら、軽い雑談に花を咲かすことより始まる。

昼休み時間はよくコーラスをして楽しむ。どうもよく、これ程、歌と山の好きな野郎が集まったものだと感じる次第。

現在、卒論生は繊維化学科から3人、他の科から3人である。

研究内容を簡単に紹介すると

沢村教授——全教室員研究の総指揮者。

林屋先生——マユからフラボン色素の抽出並びにその構造決定。

内藤先生——蚕は何故桑の葉だけを食べるか。その原因となる諸要素の決定。

小林卒論生——マユの中に存在するフラボン色素の合成。

三宅卒論生——テオグライコール酸と銅のキレート化合物の触媒作用。

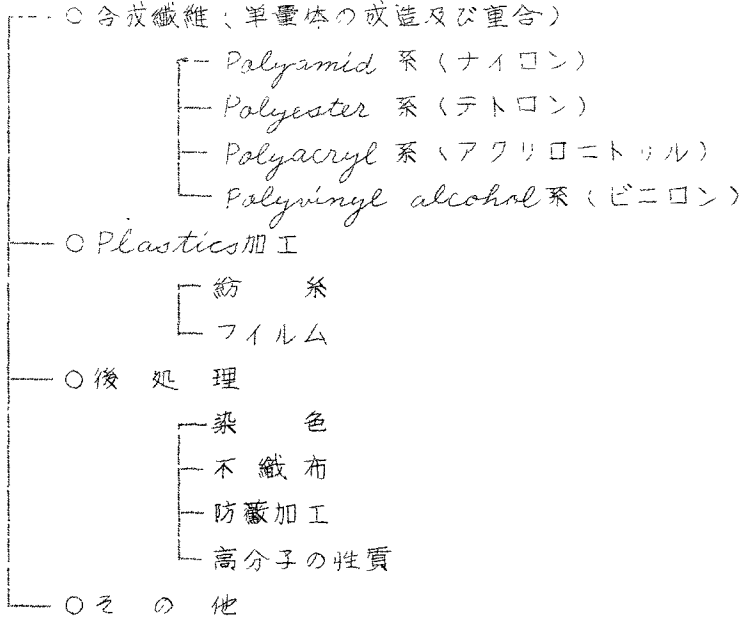
井関卒論生——酵素模型としての酸化還元樹脂の合成

相宅研究室

此の教室は虫眞としては相宅助教授一人と云える。生れてから僅か一ヶ月余りしか経過しない教室ではあるが繊維化学を代表し、時代の最先端を行く覇気のある斬新な教室です。皆様もごらんのように、内容も高度に充実し、各々の実験に工学化と努力であらゆる高分子部門に著しい成果を挙げています。

三回生以上の方には繊維Ⅱ実験でもはやなじみ深いものを持つておられると思います。Nylon 6, 66 やポバールの重合から紡糸など未だと夢見る我等若人には尽きぬ魅力があるものです。

では私達教室において何が如何様に行われているかを紹介します。



この様に特に名の如き繊維部門にのみ止まらず、合成樹脂、合成ゴム、染色等の広い分野にわたり、物理・化学の基礎研究と工業と関連して研究が行

なわれています。

先ず、Polyamid 系では善元君が Nylon の各種 monomer と Telephthal 酸との共重合の研究を行い、これはヤング率や染色の改善に非常に興味のある問題である。Polyester 系では土井君が iso-phthal 酸や無水 phthal 酸などからアレン法により工業的に未完成の Telephthal 酸合成の研究を行い、そして素晴らしいテトロンを合成しようと、古林君は Telephthal 酸の重合を減圧で行っている。Polyacryl 系では清水君が monomer の精製と acrylnitril の共重合を精力的に研究している。又 Polyvinyl alcohol 系では中根君がポバールの崩壊現象について研究している。

Plastics 加工では入手し難い Itally のモンテカテニーの Natta 教授の発明になる、Polypropylene の紡糸を沖田君が、そして Polyethylene 特に Moplene, marlex の紡糸を松尾君が行っている。又今年から大日本セロファン社の室井氏及び坂口氏の指導の下に新しくフィルムの製造研究を始めた。現在かなり好調に進んでいる中に 高圧及び低圧法 Polyethylene がありますが、塩化ビニールその他の合成樹脂も追分フィルムにされることでしょう。これは松本、池本が行い、延伸、熱処理して詳細な研究を行っている。そして京大古川教授によって理論的な研究の手助けを、又、村松氏（京大大学院生）によりレオロジー的解明をして頂いています。

後処理としては町田君が Polyethylene 及び Polypropylene の染色を行い、今は Polyethylene のタロム化及びアミド化による染色の改善に取り組んでいる。魚谷君は今や流行の non woven fabric の製造に各種接着剤を使用して研究している。

赤山君は Nylon, Vinylon 及び Acetate の吸湿性について研究し、現在注目を浴びている Silicon Emulsion を入手して研究を行っている。

その他相宅先生が数十年にわたって高分子の溶解度と凝集エネルギーとの関係について研究を行っています。

又、近畿各地の工場の依頼及び指導に多忙を極めておられます。

荒田研修生は高分子の着色と合成繊維の染色及び樹脂加工や防霉加工等、その他学生の手話をすると共に、大阪、京都の工場の依頼指導に寧日のない様子です。

坂口研修生は、本研究室にビニール、ポリエチレン、合成ゴムなどの発泡についての研究するかたわら Plastics 工場の指導及び学生の研究指導に熱情を注いで下さっています。

佐々木研修生は昨年からはるばる北海道より上京して、合成繊維ロープの研究に余念なく今年もまた北海道と京都を幾度か往復し、本教室で出来た *Polyethylene* や *Nylon* の *Rope* を北洋漁業等の実用に寸暇も惜しんで研究しておられます。

室井研修生は東工大を卒業され、大日本セロファン K.K 研究室に勤務されるかたわら、今年より本研究において各種合成樹脂フィルムの研究及び学生の指導に当たっておられます。

こうして見ると、実に多方面に手を出している我々も、なお多く残された重大な実験を決して忘れてはけません。すなわち、大自然へ向ってです。スポーツは勿論のことながら、明るい日ざしを浴びて研究室員全員が楽しく *Hiking* や登山に出かけます。おごなりの楽しみはとにかくオーに相宅先生が無この *Hike* 好みだから和気あいあいだ。それに撮った写真が全て自分達の手で楽しめる。

接写、複写、極微粒子現象や増感、及びモンタージエなどの特長技法も自由に楽しめます。その上に材料費が市価の $\frac{1}{3}$ ~ $\frac{1}{4}$ で済むのだからありがたい。

もう一つ電液科学研究室(仮名)が出来上がった。お氣付きの方は少ないと思いますが、実験室の西南端の木立の中にある建物がそれです。各種測定器も装備されましたので、時代の范形テレビも今こそカラーテレビだが、近々には白黒テレビも生れることだろう。

又合成高分子研究クラブも結成する予定です。

なお、野球、庭球、卓球等、いささかのつわものはかりだ。各教室の挑戦を待つ。

— 池 本 —

スポット知識

テトロン (Tetron)

所変れば品変る。いや所変れば名も変るとでも云おうか。1941年に英国で初生声を上げた合繊の寵児と云えば、諸兄弟ならばすぐにテリレン (*Terylene*) と答えるだろう。これが日本で製造販売されるとなるとテトロンと改名した。その名の由来は原料の *ethylene glycol terephthalate* の テ と ト にラテン語で繊維と云う意味の ロン をつけたとか。これは偶々ニ大メーカーの テイジン と トーレー のイニシャルに一致するが。米国では *Dacron* の異名をもっている。(K.M)

編集後記

○原稿の集りが遅くて発行が1月遅れてしまいました。編集部も新しいメンバーで、やっと軌道にのりかけたこの機関誌を発展させるために張切っています。頁数が前2号と比べて少々減ったのは淋しいことですが、繊維化学科学生のつながりの意識を強化するために、前2号とはかなり趣の変わったものが出来たと思っています。

○以前からの懸案であった機関誌の名前は、編集部の方で暫定的に“CHAIN”としました。あらゆる意味でぴったり来る名前というものは、ありそうでなかなか思いつかないものです。機関誌は毎号毎号新しいアイデアでゆくべきだと思いますし、一つの型にはまってしまうことは致命的となる恐れがあります。機関誌に対する批判一般、意見などは、編集部への注文としても、投稿の形ででも、大いに歓迎します。(編集子)

発行日	1959. 7. 1
発行	京工織大繊維化学科学生
印刷	北斗プリント社 (TEL 44-6546)
編集	繊維化学科学生機関誌編集部
編集部代表	太田 晋一
